

小説「相生橋にて」　〜 試し読みいただける方はこちらから〜

◆昭和六〇年八月一日午前七時五十七分〜

「この電車、三〇キロしか出んの？そりゃあ廃車もしやあにやあ・・・」

古めかしいマスター・コントローラーを握りしめながら、ミキはボヤいた。

「昭和二〇年の製造よ。当時はそれでも速かったんよ」

まるで昔をよく知る老人のような口ぶりでアケミが返す。ミキは、何度も目をこすりながら、そして大きく瞬きをしながら、前方を注視していた。この電車のフロントガラス、外の景色が時々重なって見えるという。

「あらー、もう追いつかれたんかあ・・・」

アケミは後ろを見るなり軽く舌打ちをついた。「広島駅」の方向幕を掲げた後続電車が、通勤客を満載して追走している。広島島の路面電車では最も新しい910系だった。

「今・・・七時五十八分かあ」

アケミは時計を見ながら、バインダーに挟まった企画書の余白にスラスラと何かを書き込んでいた。

△昭和六〇年八月六日、被爆電車に乗って平和学習に参加しませんか？▽

この企画が持ち上がったのは三ヶ月前のことだった。アケミは本社広報係の担当で、この企画の発案者だ。これまで電車系の広報と言えば宮島観光が主流であった。ところが実際は、路面電車に乗って原爆ドームや原爆資料館に行く観光客の方が多い。にもかかわらず、原爆をダシに路面電車の宣伝をする訳にもいかず、それ以前にそんな恐ろしいことは考えも出来ない、そんな空気があった。負の遺産というデリケートな問題がそうさせたのかも知れない。だから会社は「原爆」を事実上「無視」していた。

最近、この「原爆」を無視出来なくなっていた。とある鉄道雑誌に「被爆した路面電車が未だに存在している！」という事実が紹介され、問い合わせが増え始めたのだ。広報担当に着任したばかりのアケミは、質問されても答えに窮した。原爆投下から四〇年、当時を知る社員はほとんどいない。

ある日、山本という、元東京都電の技師だった年配の整備員が、昭和二〇年製造の211号車が近く廃車になることを教えてくれた。原爆による被災を乗り越えて、戦後の復興輸送にも活躍したのである。

どうせ廃車となるなら有効活用出来ないのか？アケミは食事中も、化粧室にいる時も、布団の中にいる時も、無いアタマを振り絞って考えたが妙案が浮かばない。たまたま平和公園を歩いているとき、語り部の老人が修学旅行生相手に説明を行っている姿を見て、突如としてアイデアが閃いた。あの被爆電車を走らせながら、語り部のお話を聞く会を催してはどうだろう。参加者は小学生を募って。

この企画は上にもあっさり認められた。特別大きな準備を必要としない、無難な企画と受け取られた。会社が平和教育に理解を示し、協力していることをアピール出来る訳で、イメージ戦略としてまあ有効でしょうと。

この企画はそれなりに反響を呼び、広島市内外の小学校から問い合わせも相次いだ。最後は「厳正なる抽選」の結果、市内のある小学校児童二〇人の参加が決まる。アケミは、この被爆電車の運転を、会社で唯一の女性運転手ミキに託すことにした。戦時中、男性社員が相次いで出征して行ったことで、路面電車の運転を女学生などの若い女性が担っていた、という史実を踏まえてのことである。どうせなら、当時の運転士姿に扮して・・・ここまで着想が広がったものの、当時の正確な服装が分からず頓挫、通常の制

服で乗務することにした。そして肝心の被爆電車であるが、休車状態が長くて整備と試運転を繰り返す必要があった。しかもミキのために習熟運転もせねばならない。予想外にやるが多かった。それなのに、社員の間心は低く、盛り上がっているのはアケミとミキだけだった。

昭和六〇年八月一日、この日はミキに211号車の運転をさせつつ、八月六日当日の段取りを確認するのだ。己斐電停を出発し、語り部のお話を聞きながら市内中心部へ。原爆投下の八時一五分をもって車内で黙祷。その後、本社車庫で車両見学、会議室でお茶菓子を並べて当社運転士との懇親会、記念撮影、再び211号車に乗って己斐電停へ戻り、保護者の出迎えを受けて解散。これが大まかな流れである。

さて、アケミとミキだけに乗せた211号車は、原爆投下目標であった相生橋に差し掛かった。路面電車の軌道の両側に車道と歩道が整備され、橋の真ん中からは平和公園や原爆ドームが見渡せる、実に見通しのいい直線道だ。時刻は八時ちょうどを回った。ミキは、橋を渡り始めるなりブレーキに手を載せた。前になんか停まってない？という

のだ。アケミが見る限り、橋の上に電車の姿は見えないし、クルマが軌道上を塞いでいる様子も見えない。

「ミキ、ちょっとこのヘンで一旦停車して」

ミキは指示どおり、電車を相生橋のちょうど真ん中で停車させた。

「ここから原爆ドームとか、全部見えるじゃろ？んー三分が限度かねえ。語り部の人に、ここが投下目標じゃったとか、そういうお話をいただけちゃう思うの」

アケミの計画は、かなり細かい。

「やっぱり何か停まつとるような……え？八時一五分ちょうどに、ここで停車せんのか？」

「その時間をもっと混雑するんよ。六日も平日だからね……。黙祷は本社前あたりかしら。だって、このタイミングが条件で許可されたんよ」

アケミは後ろを振り返る。後続の広島駅行910系は、途中の電停で何度も停車したものの、高加減速機能をフルに活用してか、やはり追いついて来た。

「ミキ、そろそろ行こうか……」

目線を前に戻しつつ、そう言いかけた瞬間、アケミは思わず息を呑んだ。運転台上に立っているのはミキではない。年齢は一五歳か一六歳くらいの少女で、何やら古めかしい

女学生のような服装をしている。しかも頭にハチマキを締めているという、何だか異様な姿だ。

「えっ？あ、あんた誰？」

アケミ以上に泡を食っているのは、このハチマキ姿の少女であった。目の前の光景に茫然とし、さらにアケミと目を合わせた瞬間、驚愕のあまり金縛りに遭ったように痙攣した。

フワアーン、フワアーン！後続の910系が痺れを切らして警笛を鳴らしている。前の試運転車は何してる？故障？警笛を翻訳すると、そういう意味になろう。警笛の鳴らし方で運転士が何を言いたいのか、分かる人間には分かるのだ。

アケミは警笛で我に返った。「あんた運転出来る？」と問いかけると、少女も我に返つたらしく、「は、はい！」と返した。少女は、ミキよりもむしろ手慣れた仕草でブレーキを解除し、マスター・コントローラーを……